

連載

世直し共闘

(第六回)

酒井 雅親



15 父母分裂

毎年、四月から五月にかけて、PTAの総会が終わると、各学年の父母側の委員や各種部会(文化厚生部など)の委員が決定される。阪本小学校PTAでも、一九八〇年の五月半ば、恒例の組閣が無事終わり、新年度の活動がスタートした。

ところが、六月を過ぎ七月に入ったあたりから、周りのだれもが予想もしなかった異変が起こった。K校長の「奇襲攻撃」が開始されたのである。

阪本小の児童は、その半数以上が江東区などから通ってくる「越境」組によって占められている。「名門校」

の異名がそうさせるのであろうか。なんといっても阪本小は、その創立時(明治六年)の名称が「東京市第一大學區第一番小學校」である。この学校の卒業生は「日本の小学校」を出たことを誇りとしている。

K校長は、この「越境」組に眼をつけた。こちらの父母を掌握すれば多数派になれる。事もあろうにKは、すでに動き出しているPTAの諸委員のうちから地元(学区域内)選出の父母をその役から引きづり降ろす「更迭命令」を六年担任に下したのである。

六年担任の一人は教務主任のAであり、もう一人は前年度転入組のBであった。前年度に五年担任であったO教諭が当然持ち上がるであろうと思われるいた担任人事

は、彼女が職員会議で酒井提案に賛成した故をもって、この年、見事にひっくり返り、六年父母の間では早くもさざ波が立ち始めていた、その矢先のことである。

K校長の性格そのものをあらわにした電話による地元委員引き降ろし工作が六年担任によって密かに開始された。Aは、校長の命令を忠実に実行したが、Bは悩んだ。いったん決まったものを強権でもって変えようなんて、そんなことが自分にできるわけがない。しかし、しかし……。恩師の言うことも一度は聞かねばならぬ。彼はしむしむ何件かの電話を自宅から入れた。だが、更迭の理由がない。彼の説得はしどろもどろになった。

この時、そばで彼のうろたえぶりを見ていた妻が言った。「あなたは何をしていますか。いくらK先生の指示とはいえ、それは人の道にはずれています。どつしても、と言うのなら、私と別れて下さい」。――。

後年、Bは述懐している。「あの一言で、私は工作をやめました」と。K校長夫妻は、Bが結婚する時の媒酌人だったのである。

◇ ◇

“PTA委員更迭作戦”は、Bの脱走もあって不成功に終わった。しかし、校長の意図は半ば貫徹された。噂は噂を呼び、阪本小の父母は次第に親校長派と“反”校長派に分裂していくのである。その態様は概ね校長自らがにじり寄って作った「越境」組を中心とする親衛隊と追い出された都教組組合員を惜しむ層に分かれる、というものであった。

そして、この後者の組に、私たちとバレーボールを楽しんでいたママさんたちも入れられ、手ひどい引き降ろしの仕打ちに遭ったのであった。

16 いじめ



PTAの役員クラスは、例年その大半は地元から選出される。学校に連絡のため出向くことが多いので、地下鉄に乗って来なければならぬ「越境」組では十分その任を果たすことができないからだ。

Ｋ校長もさすがにこの人事にまで口を出すことはできなかった。そこで彼は、別の作戦に出たのである。

一二数年、PTAの役員は、地元商店街の私とほぼ同世代の人達が順送り引き受けていた。彼等は共に阪本小の卒業生であり、幼い頃から「竹馬の友」としてつき合ってきた仲間同士である。この年の会長は、温厚なクリーニング店主であった。

この会長に、Ｋは事あることに難癖をつけた。PTAの行事の打ち合わせのたびにできない注文を出し、親衛隊の委員を使って役員を突き上げた。時には、校長自らが役員・委員のしている前で会長を罵った。PTAの運営は困難を極めた。学校内のおちこちで父母の委員が口論する場面が多く見られるようになり、そのたびに教師たちは眉をひそめた。

PTAの顧問会などでは、当然のことながら、こつした学校内の混乱状態を憂える発言が相次いだ。こういう場合、校長は私の名を出して責任転嫁を計った。「混乱の原因は酒井さんたちの言動にあります」。

たまりかねた元会長（現・自民党区議）が、「私にも血の気の多い時がありましたよ。だけど、そうした熱意を汲み取ってあげるのが校長先生の役目ではありませんか」と意見を述べたという。彼は大学在学中、「学生運動に没頭した時期があるんですよ」と私に語っていた。

地元父母と校長との対立は抜きさしならないところまで発展した感があった。PTAの新年会などで酒が入ると、父母たちがそこそこでそれぞれ信頼を寄せる教師たちとヒソヒソと話す場がいくつもできた。私のところへも、「酒井さん、お母さんたちが応援してますから、がんばって下さい」と声をかけてくる親があらわれたほどである。



◇ ◇

校長のいじめに遭ったクリーニング店主は、この年度で子供が卒業し終わったので、その役を降りたが、Ｋ校長在職中は、校長室に飾る「歴代PTA会長」の写真をついに撮らせなかった。ただの一度も報われることのない。彼の写真が額に入るのは、二年後のことである。

17 病巣



こうしたゴタゴタの渦中での最大の被害者は、S教頭であった。彼は、K校長着任の翌年に新任の教頭として阪本小に来たが、年齢はKよりわずか一歳下という、いわば「遅出」の教頭であった。このSを、Kは「ま鼠」のように使った。私が反発すると校長との板挟みになり、Kからその「無能力」をなじられた。

月に一度、給料日にSと区役所に赴く時が、二人だけで話せる時間である。私は「ぼくは教頭先生にはなんの恨みもありません。しかし、校長先生のやることには黙ってはいただけません」と話した。「わかっています、わかっています」と彼は繰り返していた。

彼は翌八一年、区内の教頭として転出したが、歡送迎会の二次会で私のそばに来て、「酒井さん、私はたとえ校長になるようなことがあっても、あの人のような人にはなりません。大変お世話になりました」と言って、ポロリと涙を落とした。もともと寡黙な人ではあったが、

「家に帰ると、疲れ果てて、妻と会話もできない状態でした」とも語っていた。

S教頭は、一九八四年三月、その学校で教頭として職歴を終えた。

◇ ◇



「あいつが来たら、位牌の前で土下座させてやる。」
S元教頭の葬儀場の前で、私が独りて息巻いていた。

Kは退職後、東京銀行の嘱託となったが、退職間際のSに再三電話をかけ、退職金や年金を東京銀行に入れよ、としつこく迫ったという。「十回以上もかけてきたんですよ。私をあんな目に遭わせておいて、よくもまあ……」と、つい四カ月前に開かれた「阪本会」(現・旧職員集い)の席上でSは話していた。事情を知っている参列者の中からは、Sの胃癌の病巣はKがつくったにちがいない、という呟きもこぼれた。

暗がりの中をKがやってきた。飛び出そうとする私を、QやRが制止した。一九八六年一月二五日、その夜、私はすっかり悪酔いをしてしまった。

連載

世直し共闘

(第七回)

酒井雅親



18 「茶釜」

一九八一年四月。ついに都教組の組合員は一人もいなくなってしまう。それでも私には、自称「右翼」のQを中心とする味方の軍団が約半数は残っていた。この年から二年間、阪本小学校は文部省の研究指定校となる。

K校長が自分の最後の花道を飾るために強引に持ち込んだのであった。彼の専門分野である算数の研究に全教職員が「一丸」となって取り組む日々がしばらくは続くことになる。

親校長派と非校長派の動きは、しかし依然として別々であった。特に、七九年の転入組はいつも同一行動をと

った。土曜日、勤務時間が終わると、教職員のほとんどが食事に出かける。Kが江戸川区の指導主事時代に目かけたといわれるGが「校長先生、参りましょう」と、いそいそと声をかける。校長を先頭に六人がそろそろと付いて行く。恒例の「昼食会」の始まりである。彼等が出かけるのを見届けると、今度はQが「では、我々も参りましょうか」とおどけ、非校長派を引き連れて外出する。職員室には、私と後任の教頭Fが残った。

このF(現・区内校長)は、前任のSと違い、なかなかの「遣り手」であった。二人だけになると、なにくれとなく私に話しかけてくる。「私はねえ酒井さん、指導室長から校長さんと職員との緩衝役になるように、と仰せつ

かつて阪本に來たんだよ」「酒井さんのことも都学勞のことも勉強してきた。第一、『学校事務労働者』という本を買って読んだのは、管理職では私くらいのものだ」と盛んに牽制球を投げてよこした。

この頃、両派の動きは夜も同様で、校内の親睦会が引けた後、二次会も別々に行なわわっていたが、Fは校長を自宅に送り届けると、非校長派の我々の席に戻り、一緒に酒を飲んだ。それでいて、日常はKの意を受けて、そのやり方を全員に指示した。

いつのまにか、誰言うこともなく「茶釜」の渾名あだながFに付けられた。体型も似ていたのである。

19 寝返り



都教組の組合員がいなくなつてから、非校長派の團結はかえつて固まつたようであつた。

この年、二名の転入があつた。一人は二十代後半の女性、もう一人は新卒の男性であつたが、この二人も目敏めびと

く職場の雰囲気を感じ分け、空気の良し我々の席に顔を出すようになった。私たちはそれとなくオルグを始めていたのである。

前年、PTA委員更迭作戦を失敗に導いたBは、このほか寂しそつであつた。そこで、彼が土曜日の親校長派の「昼食会」に付き合わなくなったのを見計らつたようにQが声をかける。Bは、それを待っていた。そして、ある夜の飲み会の席上、Bの口から、二年半前の校長宅での「招待」のもようが明らかになる。

一九七九年の三月末、六名の転入者はK校長の自宅に招待された。ひとしきりの和やかな懇談が終つた後、Kはおもむろに学校内が「混乱」している旨を述べた。そして、この「混乱」の元凶は酒井とその取り巻き連にある。みなさんは阪本小を「正常化」するために呼んだのだから、それなりのケジメはつけてもらいたい。したがつて、私的な場で酒井とその同調者たちとは酒はもちろん、お茶も飲んでならぬ。特に、酒井の言動には監視の眼を怠ることなく、おかしな動きがあつたら直ちに

私に報告しなさい——おおよそこういった警告が六名に
発せられたのだという。こうして「昼食会」は組織され
たのであった。

あれほどきつく言っておいたのに、Bは自分の命令も
満足に遂行しえないばかりか、敵に寝返った。Kは怒り
心頭に発した。その怒りをKは、Bに算数の研究レポー
トを提出させ、これを何度も書き直させることであらわ
した。研究会の席上、みんなの見ている前で「あなた
はなっていない」と彼のレポートを批判し、「これでは全
国の先生方に見せられない」と、目を吊り上げた。

Bの教室に遅くまで灯が点った。しかしそこはBだけ
ではなかった。Rがいた。Qがいた。そして新卒のDも
手伝った。これらの応援を受けながら、Bは「仲人」の
仕打ちにじっと耐えた。

20 青筋



その一方でKは、二人の転入者に対するやさしい指導

を忘れなかった。組合員の代わりに入れた二人である。
敵に渡してなるものか、という意気込みがそこにはあっ
た。Kは二人に米国の学者が書いた書物の翻訳とその応
用というテーマを与え、文部省の専門官を引っばってき
ては研究結果の批評をさせた。「お二人のはなかなか良
くてきております」という専門官の言葉にKは目を細め
ていた。

秋になった。この年の親睦会の旅行は、当時流行りの
サロンカーを使っての長旅であった。ところが——。

バスが発車すると間もなく、中央のテーブルに校長が
陣取り、二人を呼び寄せた。そして、あのやさしい口調
で研究の手ほどきを始めたのである。テーブルで一杯や
ろうと思っていた連中は出鼻を挫かれ、近寄れなくなっ
てしまった。唄も出せず、車内は白けムードでいっぱい
となった。なによりも困惑したのは当の二人。Kの「親
切」を断るわけにもいかず、辺りを気遣いながらの「研
修旅行」に苦りきっていた。

(二)で、私が助け舟を出した。幹事が用意していた磁

石式の囲碁セットを持ち込み、「校長先生、旅行ですから、一局やりましょうよ」と割り込んだのである。さすがRが「それはいいですね。お二人の対局はぜひ一度見てみたいと思っていたところですよ」と、意味ありげな合いの手を入れた。職場では彼がナンバーワンであり、私は三目置いても勝てなかった。そのRの一言で校長も気が変わったらしい。若い二人に「またあとでね」と言っただけで碁盤に向かった。飲みたい連中が天の助けとばかりにテーブルに集まって来て、「世紀の対決」を肴に酒盛りを始めた。「釈放」されたDもちやっかりと仲間に加わり、赤い顔で時々ちやちやを入れていた。

結果は、Kの連戦連勝であった。校長親衛隊の男性二人が「さすがは算数の権威、お強いですね」とKを褒めちぎった。校長はにんまりと笑った。香兵衛連も満足気であった。うまい酒が飲めた――。

◇ ◇



旅館に入って着替えるやいなや、「酒井さん、もう一局やろう」と言いだした。「風呂はいいんですか?」と

私が言つと、「いいよいよ、寝る前にしよう」と、自分で帳場に碁盤を申し込んだ。校長は明らかに、味をしめたのである。につくき酒井に「ここで止めの一発を、と意気込んだのであろう。「オーイ、また、やるんだってよ」と親衛隊がみんなに声をかけた。男性陣の全員が風呂にも入らず観戦した。始まる直前に、Rが私に目配せをした。今度も負けろ、というのである。

だが、私にとっては、大きな情勢の変化があった。もう、若い二人を救う必要もない。この鬼め、返り討ちにしてくれるわ。同じザルでも、穴の大きさが違うのだ。序盤にして、右、左と敵の陣地を奪い取った。誰の眼にもKの敗北は明らかであった。「ウーン」と唸る校長の額に青筋が立った。「もう一回」と挑むKを、二度目も容赦なく投げ飛ばした。QやBらがにやにや笑っている傍で、親衛隊は色を失っていた。

宴会のあいだ中、Kは不機嫌さを隠さなかった。が、夜、Rが五目置かせて僅差で負けてあげたので、翌朝はニコニコしていた。単純な男であった。